

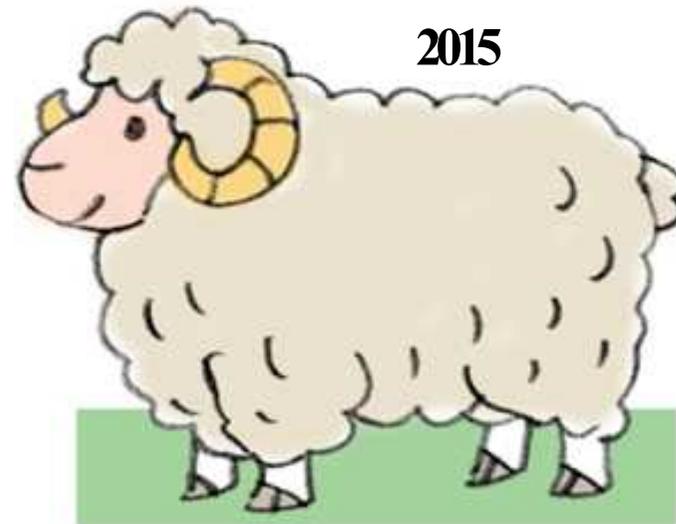
インターネット俳誌 / SEIGETU

清月

目次

近詠	雑詠選	寸感	互選集計結果報告	互選一〇句の披講	
ゆたか	ゆたか	ゆたか	高点句	幹夫	公平
1	2	7	8	睦夫	順一
				よし子	
				恵山	
				省司	11
				美琴	10
				しゅじ	
				睦夫	9

8 中 の 出 句 15 名 延 べ 709 句



第 181 号 平成 27 年 8 月

近詠

野田ゆたか

底紅の彩の失せゆく日暮かな

稲妻の夜半の静寂を掻き乱す

早起は一文の得説き涼し

限りある命惜めよ秋の蟬

手花火を囲む笑顔の子等映ゆる

雑詠

(太字は秀句)

ゆたか選

あの山が次の札所や鰯雲 岐阜 石崎そうびん

伏流水尽きることなし新豆腐 同

奥美濃に一揆の歴史踊唄 同

一筋の足跡浜に晩夏光 同

信長の館の跡や桐一葉 同

単線の眺めて飽きぬ窓の秋 千葉 清水恵山

流灯の離れつ寄りつ遠ざかる 同

故郷の誇る野菜や千石豆 同

また会へる日を独り言霊送る 同

千屈菜や山の湖波静か 同

秋鯖の縞丸々と朝の浜 千葉 田村公平
 盆明けて人が波打つターミナル 同
 位置の線決める天測星涼し 同
 夜学子の帰宅自転車声高に 同
 強情も褒められている生身魂 同
 腕白も今は昔や生身魂 鳥取 瀬尾睦夫
 飛ぶやうに売れていちごのかき氷 同
 星々の瞬くばかり門火跡 同
 手花火や消へて小さき輪を解かる 同
 庭に摘む桔梗一花供へけり 同
 迎火やおかへりなさいを声にして 吹田 池下よし子
 鉢植ゑの小振りながらも秋薔薇 同
 絶やさじと若き語りべ原爆忌 同

スーパーの野菜コーナー秋めけり 吹田 池下よし子
 公園のベンチぼつんと晩夏光 同
 古里のしきたり多き盆供養 三重 後藤允孝
 夕闇の川面彩る納涼船 同
 青柿やいさかひ絶えぬ青二才 同
 郡上節伝うる祭囃子唄 同
 西空にやうやう浮かぶ鰯雲 同
 暗闇に残る蛍を解き放つ 岡山 橋本幹夫
 カンナ燃ゆたつた一人のためにだけ 同
 ゆるやかに下るせせらぎ野路の秋 同
 ひたすらに走り続けし夏休 同
 捨て湯とて断捨離のうち夏の果 同
 葉の露は揺られて揺れて元の位置 大阪 木村宏一

山頂にケーナの音色風は秋
 大阪 木村宏一
 浪搗くやぶつぶつ泡の独りごと
 同
 押鮭は姉に継がれて里の味
 同
 花茗荷日陰にありて淡明り
 同
 葉鶏頭夕日を近く引き寄せて
 静岡 渡邊春生
 人の声 蝸の声 神木に
 同
 芋の露 硯の海に静まりて
 同
 初秋の人の出会ひの小径かな
 同
 落鮎や戦無き世の静かさに
 同
 健康は老いの願ひや星祭
 三重 山口美琴
 虫の音に安らぎもらふ仕舞風呂
 同
 雑草も季節移りて秋草に
 同
 ままごとの小さな母さん赤のまんま
 同

園児らも黙禱したる原爆忌
 三重 山口美琴
 コーヒーの香る狭庭に秋の雨
 千葉 筒井省司
 曇日に咲けどひと日の白芙蓉
 同
 名も知らぬ秋草を手に散歩道
 同
 張りつめた思ひ弾けて桔梗咲く
 同
 夜長しまたも見返すテレビ欄
 愛知 駒田暉風
 号笛に園児駆け出す運動会
 同
 風抜けてこぼれて匂ふ稲の花
 大阪 森戸しゅじ
 赤のまま風に靡いて恙無し
 愛知 石川順一

寸感

ゆたか

あの山が次の札所や鰯雲 そうびん
発心を実行すべく、三十三所又は八十八
所の霊場を巡りお札を納めてゆかれる作者。
札所寺の山頂を覆うように広がっている
鰯雲の景が穏やかに明るく伝わってきます。
徒歩苦を行間に納められのがいい。

単線の眺めて飽きぬ窓の秋 恵山

市街地を離れた山間や海辺に施設されて
いる単線鉄路を利用されている作者。

刻々と変わる山錦・紅葉・田畑・海など
の哀愁を帯びた景が美しく見えてきます。

写生による的確な表現が見事に決まった。

秋鯖の縞丸々と朝の浜 公平

脂がのった秋鯖の水揚げに続く仕分けや
市など一連の動きが活気に満ている浜の景。

大衆魚である鯖は、漁獲量も多く早朝の
各種従事者の動きが明るく伝わってきます。

誰もが納得する俳句に仕上がっている。

腕白も今は昔や生身魂 睦夫

盆は、故人を祭るだけではなく、敬うべ
き年長者も食事を贈るなどでもてなされる。

腕白児も、今では生身魂として遇されて
いることに感謝されている様子が覗えます。

昔を懐かしむ気持が上手く詠まれている。

迎火やおかへりなさいを声にして よし子

冥界から先祖を迎える苧殻を焼く門火や
墓前へ迎えに行く提灯の火を迎火という。

これまで丁重に先祖を守ってこられてい
る様子がほのぼのと伝わってきます。

作者の生活の良さから生まれた佳句。

古里のしきたり多き盆供養 允孝

盆の供養法は、宗派や地方により異なる
事があり、夫から妻子へ伝えられてゆく。

これまで教えられた仕来りを違えること
なく行おうとする様子が伝わってきます。

今日的な仏教道が端的に詠まれている。

互選一〇句の集計結果互選者一〇人

高点句

五点 風抜けてこぼれて匂ふ稲の花 森戸しゆじ

五点 絶やさじと若き語りべ原爆忌 池下よし子

四点 あ の 山 が 次 の 札 所 や 鰯 雲 石崎そうびん

四点 虫の音に安らぎもらふ仕舞風呂 山口美琴

高点者

十四点 石崎そうびん

十二点 池下よし子

九点 山口美琴

九点 後藤允孝

九点 清水恵山

互選一〇句

橋本幹夫選

朝顔の色に安堵の里帰り 木村宏一
 立秋や空に預けし名残雲 瀬尾睦夫
 土ぼこり立てる雨音涼新た 田村公平
 一日の残暑はじまる日の出かな 筒井省司
 残暑なほ日を照り返す能登瓦 池下よし子
 棚経や僧の配りし勤行集 清水恵山
 片陰や左通行許し乞ふ 山口美琴
 風抜けてこぼれて匂ふ稲の花 森戸しゆじ
 蝸やゆつくり止まる蹴り轆轤 石崎そうびん
 鳩群れて平和の飛翔長崎忌 後藤允孝

互選一〇句

瀬尾睦夫選

風抜けてこぼれて匂ふ稲の花 森戸しゆじ
 号笛に園児駆け出す運動会 駒田暉風
 あの山が次の札所や翳雲 石崎そうびん
 カンナ燃ゆたつた一人のためにだけ 橋本幹夫
 絶やさじと若き語りべ原爆忌 池下よし子
 単線の眺めて飽きぬ窓の秋 清水恵山
 コーヒーの香る狭庭に秋の雨 筒井省司
 秋鯖の縞丸々と朝の浜 田村公平
 芋の露硯の海に静まりて 渡邊春生
 青柿やいさかひ絶えぬ青二才 後藤允孝

互選一〇句

森戸しゆじ選

迎火やおかへりなさいを声にして 池下よし子
 絶やさじと若き語りべ原爆忌 同
 健康は老いの願ひや星祭 山口美琴
 虫の音に安らぎもらふ仕舞風呂 同
 山頂にケーナの音色風は秋 木村宏一
 奥美濃に一揆の歴史踊唄 石崎そうびん
 カンナ燃ゆたつた一人のためにだけ 橋本幹夫
 単線の眺めて飽きぬ窓の秋 清水恵山
 名も知らぬ秋草を手に散歩道 筒井省司
 葉鶏頭夕日を近く引寄せて 渡邊春生

互選一〇句

山口美琴選

天の川渡して見せる峽の宿 木村宏一
 伏流水尽きることなし新豆腐 石崎そうびん
 ゆるやかに下るせせらぎ野路の秋 橋本幹夫
 迎火やおかへりなさいを声にして 池下よし子
 流灯の離れつ寄りつ遠ざかる 清水恵三
 曇日に咲けどひと日の白芙蓉 筒井省司
 秋鯖の縞丸々と朝の浜 田村公平
 葉鶏頭夕日を近く引寄せて 渡邊春生
 夕闇の川面彩る納涼船 後藤允孝
 手花火や消へて小さき闇となり 瀬尾睦夫

互選一〇句

池下よし子選

風抜けてこぼれて匂ふ稲の花 森戸しゆじ
 山頂にケーナの音色風は秋 木村宏一
 あの山が次の札所や翳雲 石崎そうびん
 暗闇に残る螢を解き放つ 橋本幹夫
 単線の眺めて飽きぬ窓の秋 清水恵山
 虫の音に安らぎもらふ仕舞風呂 山口美琴
 一日の残暑はじまる日の出かな 筒井省司
 葉鶏頭夕日を近く引き寄せて渡邊春生
 鳩群れて平和の飛翔長崎忌 後藤允孝
 伸ばす手の袂押へて浴衣の子 瀬尾睦夫

互選一〇句

清水恵山選

夜長しまたも見返すテレビ欄 駒田暉風
 伊吹嶺の雲から頭涼新た 石崎そうびん
 ゆるやかに下るせせらぎ野路の秋 橋本幹夫
 残暑なほ日を照り返す能登瓦 池下よし子
 虫の音にやすらぎもらふ仕舞風呂 山口美琴
 名も知らぬ秋草を手に散歩道 筒井省司
 雲走り一雨ごとに涼新た 田村公平
 人の声蝸の声神木に 渡邊春生
 一滴の雨も恋しき残暑かな 後藤允孝
 新涼や水輪大きくけふの雨 瀬尾睦夫

互選一〇句

木村宏一選

風抜けてこぼれて匂う稲の花 森戸しゆじ
 伏流水尽きることなし新豆腐 石崎そうびん
 ゆるやかに下るせせらぎ野路の秋 橋本幹夫
 絶やさじと若き語りべ原爆碑 池下よし子
 健康は老いの願ひや星祭 山口美琴
 流灯の離れつ寄りつ遠ざかる 清水恵山
 名も知らぬ秋草を手に散歩道 筒井省司
 秋鯖の縞丸々と朝の浜 田村公平
 一滴の雨も恋しき残暑かな 渡邊充孝
 腕白も今は昔や生身魂 瀬尾睦夫

互選一〇句

筒井省司選

腕白も今は昔や生身魂 瀬尾睦夫
 職退きて無精髭濃き秋立つ日 橋本幹夫
 風抜けてこぼれて匂う稲の花 森戸しゆじ
 黙祷のサイレン長き花カンナ 田村公平
 葉の露は揺られて揺れて元の位置 木村宏一
 葎の花段々畑を飾りをり 清水恵山
 絶やさじと若き語りべ原爆忌 池下よし子
 久しぶり聞く帰省子の国訛 後藤允孝
 雑草も季節移りて秋草に 山口美琴
 あの山が次の札所や翳雲 石崎そうびん

互選一〇句

田村公平選

伏流水尽きることなし新豆腐 石崎そうびん

奥美濃に一揆の歴史踊唄 同

昼酒に貌てらてらと夾竹桃 同

あの山が次の札所や翳雲 同

迎火やおかへりなさいを声にして 池下よし子

絶やさじと若き語りべ原爆忌 同

若僧の声に張りある晩夏かな 瀬尾睦夫

文月や庭に托鉢僧立ちて 清水恵山

虫の音に安らぎもらふ仕舞風呂 山口美琴

青柿やいさかひ絶えぬ青二才 後藤允孝

互選一〇句

石川順一選

生くるとは使命と思ふ原爆忌 渡邊春生

山霧や獣のごとく臆病で 同

立秋のバツハ流るるティールーム 池下よし子

夕されば厠の窓にちちる虫 同

ネクタイをぐいと緩める残暑かな 石崎そうびん

虫しぐれ三色燈の回りづめ 同

神木の梢を鳴らす初嵐 清水恵山

風に問う平和の誓い終戦日 後藤允

考竿灯に想定外の風が吹く 橋本幹夫

荒畑に赤尖らせて唐辛子 筒井省司

インターネット俳句 清月
第181号
平成27年8月中の出句から

発行
平成27年9月20日

主宰 兼 編集
野田ゆたか

発行所
枚方市 大阪清月庵

清月俳句会のホームページ
[https://haiku575.info/seigetukai/
home/homu.htm](https://haiku575.info/seigetukai/home/homu.htm)